

水産研だより

【今回の内容】

- 1 フナ・モロコ等の増殖行為に水田魚道を活用へ
- 2 SEAFDEC参加国政府機関職員研修を実施
- 3 外来藻類「ミズワタクチビルケイソウ」に注意



1. フナ・モロコ等の増殖に水田魚道を活用へ

内水面の漁業協同組合には漁業権を免許された魚種の増殖義務が課せられています。一般に種苗放流が代表的な方法ですが、放流経費による経営圧迫、種苗由来の魚病の持ち込み、種苗放流による遺伝的攪乱といった問題が指摘されています。

平野部を代表するフナ・タモロコなどの魚類は、かつての氾濫原に広がる水田地帯を産卵したり、孵化した稚魚が成長したりする場として利用してきました。しかし近年では、水田と農業排水路との間に高低差があるため、フナ・タモロコなどが農業排水路から水田へ遡上し繁殖することが困難となっています。

水田魚道は水田と農業排水路をつなぐ簡易魚道です。岐阜県では、淡水魚類を育む水田地帯を再生させる方法として設置を促進しており、現在、20基程度の水田魚道が県下に設置されています。この水田魚道がフナ・タモロコなど、漁獲対象となる魚類の繁殖効果としても有効である可能性があります。

水田魚道の設置による繁殖効果を確認するため、(1)水田への遡上状況、(2)水田内での産卵状況、(3)水田内での稚魚の成育効果について、研究を開始しました。これらの繁殖効果を実証されれば、水田魚道を設置により、自然再生産力^{*1}を活用した増殖が期待できます。

^{*1} フナ・タモロコ等の自然産卵を促したり、繁殖の場として水田を活用することで資源増加を図ること(天然資源の活用)

(生態環境部 米倉)

水田魚道を遡上する
フナの親魚

2019年6月16日
9時21分21秒



水田内で孵化・成長
したフナ稚魚など

2 SEAFDEC参加国政府機関職員研修を実施

2016年に東南アジア地域の内水面漁業の安定的な発展を目的として、岐阜県と東南アジア漁業開発センター（SEAFDEC）との間で技術協力に関する覚書が締結されました。岐阜県ではこの覚書に基づいて、2017年からSEAFDEC参加国から研修生の受け入れを行っています。

2019年はインドネシア、カンボジア、タイ、マレーシア、ミャンマー、ラオスの6カ国の政府機関職員6名を研修生として受け入れ、2019年10月1日から10月10日の10日間、研修を行いました。

研修では岐阜県水産研究所及び内水面漁業研修センターの活動の紹介の他、岐阜県の水産業や養殖業の概要、世界農業遺産「清流長良川の鮎」に係る取り組み、アユやマス類等の養殖技術に関する講義を行いました。この他、長良川の伝統漁法である「鵜飼」や「瀬張り網」の見学、マス類やチョウザメ、バナメイエビ等の養殖場の視察、マス類の人工産卵床造成やアユの精巣内精子の培養実習等を行いました。

研修参加者からは「自国の水産業に応用できるアイデアを得ることができた」、「河川における天然資源の利用と保全を如何に両立させるべきか学ぶことができた」等の感想をいただきました。

(漁業研修部 武藤)



3 外来藻類「ミズワタクチビルケイソウ」に注意

ミズワタクチビルケイソウ※は、アメリカ原産の外来藻類です。日本への移入の経緯はよく分かっていませんが、近年、国内各地への分布拡大が見られ、その影響が懸念されています。ミズワタクチビルケイソウが繁茂すると、アユの餌となる藻類の生育が妨げられるおそれがあります。（※画像については下記の参考文献をご覧ください）

他の河川で使用した胴長・タモ・オトリ缶などを持ち込む場合は、ミズワタクチビルケイソウの分布拡大を防ぐため、あらかじめ消毒や乾燥を念入りに行うようお願いします。胴長・タモ・オトリ缶などの消毒や乾燥は、アユの冷水病やエジワジエラ・イクタルリ病など、魚類感染症の病原体の持ち込みや拡散を防ぐためにも不可欠です。良好な漁場を維持するため、ご協力をお願いします。

〈参考文献〉

芦澤晃彦・加地弘一. 2019. ミズワタクチビルケイソウが放流アユの定着に与える影響. 山梨県水産技術センター事業報告書, 46: 34-38. https://www.pref.yamanashi.jp/suisan-gjt/documents/jiho46_p34-38.pdf

洲澤多美枝・洲澤 謙. 2016. 日本に侵入している外来珪藻. 豊田市矢作川研究所季刊誌 RIO, 201: 4.

<http://www.yahagigawa.jp/archives/003/201610/214c801e7072e0023d072a68ee9b58bd.pdf>

(資源増殖部 藤井)